

# 問題解決能力を育てる総合的学習

深浦小学校 天内 純一

## 要 約

追究する問題が、子どもにとって「解決の必要性がある」ものであり、子どもが解明したい、追究したい、または取り組んでみたいと感じた時に、主体的な追究活動がなされる。

子どもに「解決の必要性がある問題」として把握させるために、次のような方法を考えてみた。

他からの要望や依頼を受けて学習をスタートさせる方法、プロジェクトに参加する方法、教師の環境設定や働きかけの違いによるいくつかの方法、ゲームを利用した方法などである。それぞれの方法について具体的な例をあげながら述べてみた。また、総合的学習に欠かせない教師の力量や、学び合い、認め合う集団づくりについてもふれてみた。

〔キーワード〕 小学校、総合的な学習、問題解決能力、問題把握

### I. はじめに

平成11年の4月に新学習指導要領が提示されてから2年を経て、現在各校においては、地域や環境、情報、福祉・健康、国際等に関することがらについて、教材化や各単元の指導計画作成、年間指導計画作成等がさかんに行われている。教材の開発が進み、実践事例も数多く紹介されるようになってきた。

その一方で、子どもに問題を持たせるための手だてや過程がいまひとつ明確になっていない。総合的な学習には「問題解決の資質や能力」を高めるという大きなねらいがある。その役割を果たすためには、まず、子ども自身に強い問題意識を持たせる必要がある。

従来から、各教科においても、この問題把握の段階が重要であることは言わ

れてきたのであるが、十分な成果をあげていないように思われる。その原因は多岐にわたるが、その一つに教科学習の場合、学習内容が確定していることがあげられる。6年の社会科を例にとれば、歴史・政治・世界の中の日本という3つの大きな単元がある。この中に含まれる学習内容は豊富である。歴史単元一つをとってみても、国の形成から太平洋戦争後の社会まであり、例示されている人物は42人にもものぼる。内容の精選に苦慮しているのが現状である。これだけの内容を学習させるということになれば、問題把握の段階に多くの比重をかけられないことがわかる。さらに、時間数は105時間と少ない。(14年度からの新学習指導要領ではさらに5時間が削減される。)

また、教科の学習は、その内容のすべてが子どもの生活経験や興味・関心からスタートするわけではないという実態がある。

これらのことから、ともすると子どもは自分自身の課題ではなく、教師から与えられた課題と捉えながら、各教科の学習に向かうことが多かったのではないだろうか。子どもの問題追究を大事にしている有田和正氏の「子どもの目線に立った教材開発」には、実践してみたい教材がたくさん掲載されているが、社会科の時間だけでは追試ができないように思われる。(注1)

ここに新しく登場した総合的学習がある。この学習に与えられた110時間という豊富な時間を利用して問題把握に十分な時間を取り、より主体的な追究活動をさせ、問題解決能力の育成を図りたいものである。

本稿では問題解決能力を育成するために、特に問題把握の段階に焦点をあてて述べる。また、総合的学習を支える諸条件についても触れることにする。

---

(注1) 有田和正 「子どもの目線に立った教材開発」2000年 健学社

P59 「パイナップルの実は、どんな格好でなっているの？」

学習の概要は次のようなものである。

- ・パイナップルの絵はどんな格好でなっているか絵を描く。
- ・話し合い → 結論は子どもが自ら調べ、考え出す。
- ・パイナップルの実を真横に切ったときの切り口の絵を描く。
- ・話し合い → 「はてな？」を残す
- ・パイナップルの実を上・中・下の部分に切ったら、どこが一番おいしいか。前述同様、結論は出さない。
- ・他の果物にも応用出来る。

パイナップルから沖縄県の産物の学習に入る。

## Ⅱ. 研究の目的

- 総合的な学習における「問題を解決する資質や能力を高める」ための、問題把握の段階のあり方を研究する。
- 総合的な学習を支える諸条件について研究する。

## Ⅲ. 研究の方法

- 総合的な学習に関する文献や、インターネット上のHPを幅広く調べる。
- これまでに参加した研究会等の資料を分析する。

## Ⅳ. 研究の実際

子どもの追究意欲を高める方法として、問題把握（導入）を中心に、主として4つの項目に分けて論を進めたい。

### 1. 他からの要望や依頼等を受けてスタートする学習

前号で東京都の小学校と深浦小学校がテレビ電話システムを利用して交流する学習について述べた。（詳細については前号（1）を参照していただきたい。）青森県に住む深浦小学校の子どもたちが、他県の小学生から水産業について情報提供してほしいという依頼を受けてスタートするものである。

また、三内丸山遺跡を紹介するという実践もある。（2）（3）この遺跡は縄文時代の遺跡としては全国的に有名であり、社会科の教科書（東京書籍）にも取り上げられている。

これらの学習活動には、交流する相手校の要望に応えるという明確な目的があり、子どもたちの追究意欲は旺盛であった。

このように、他からの依頼を受けるという方法を取り入れる学習は、子どもの学習意欲を高め効果的であるが、その他に次のようなものも考えられる。

#### ①プロジェクトに参加する。

##### ・古代米プロジェクト

古代米の種や苗を他県の小学校に送り一緒に育てるというものである。

##### ・桜プロジェクト

桜の開花状況や自然環境について情報交換する。NTTが呼びかけて県内外の学校が参加した。

・キュウリプロジェクト

今年度深浦小学校の4年生が参加した。次の図のように、岐阜、広島、



鹿児島の小学校が参加校である。

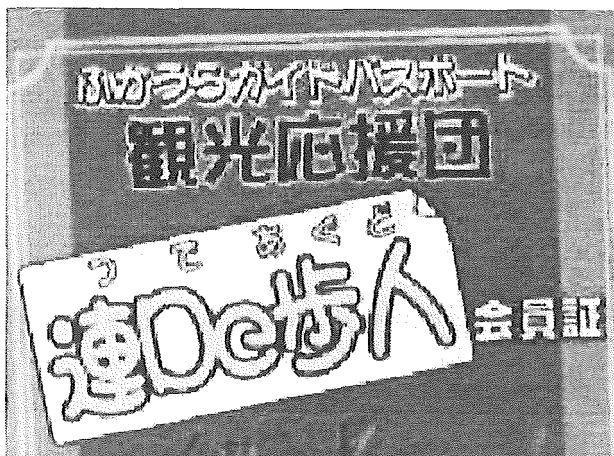
同じ土、同じ種を使い、同じ日に種まきをして、キュウリの成長を見守るというものである。

今年度の交流はキュウリの成長を報告し合うだけに終わったが、もっと幅広く方法を考える必要がある。

②町役場観光課の企画等に参加・協力する

深浦町観光課に「つで歩く人」という企画があり、参加希望者に下の写真のようなパスポートを発行している。「つで歩く」というのは 地域の方言で、町を訪れた人を案内するという意味である。これは、大人を対象としたものであり、観光客を案内して歩くのは小学生には無理であるが、観光課の手伝いをし、JR深浦の駅前で町の案内をすることは出来る。「この仕事を是非小学生に担当していただきたい。」という観光課の依頼を受けて子どもたちが取り組むのである。

観光客に案内するためには、まず自分が町のいろいろな場所や歴史、くらし



などをよく知っていなければならないということになる。そこから「町を徹底的に調べる」という追究活動がスタートする。これはねらいがはっきりしているので子どもたちの意気込みが違ふ。大事なことは、教師が導入の段階でこのプロジェクトへの参加意欲を高めることである。

### ③二分の一成人式

この名称をつけた岐阜大学近藤先生の先行実践があるが、それを一部追試しながら、学習意欲を高めるために、「依頼・要望」を取り入れるものである。概略は以下のようになる。

- ・「町の公民館を利用して二分の一成人式を行います。アルバムづくりや発表、展示に協力して下さい」という依頼を受ける。
- ・自分の成長について調べる。

来賓としては、PTAの役員や地域の方々が考えられる。小学校の数が少ない町村では、町長や村長に協力していただくことも不可能ではない。また、数校での活動も考えられる。最近、成人式がなにかと問題になるが、「成長」に対して周囲の人々の大きな期待や願いがあることに気付かせ、感謝の気持ちを持たせることが出来る。

### ④同じか似ている校名の学校と交流する

深浦小学校という名称の学校は全国に4つある。



- |            |                           |
|------------|---------------------------|
| ・青森県の深浦小学校 | 青森県西津軽郡深浦町大字深浦字寅平 6 2 - 6 |
| ・新潟県の深浦小学校 | 新潟県佐渡郡小木町深浦 3 3 6 - 6     |
| ・山口県の深浦小学校 | 山口県下松市笠島 1 1 1 7          |
| ・愛媛県の深浦小学校 | 愛媛県南宇和島郡城辺町深浦 3 - 1       |

このように、同じ名称の学校と交流し、互いの地域の様子を伝え合う（「全国深浦っ子プロジェクト」）ことによって、地域の学習の意欲づけを図る。

また、平賀東小学校のように末尾に方角がつく学校は数多い。「〇〇〇東小学校」でHPを公開して学校は40ほど見つけることができる。このような学校が集まるプロジェクトも考えられる。このような「共通点のある小学校」は、インターネットが急激に普及した現在では、教師の的確な着眼点やアイデアをもとに調査すれば探し出すことが可能である。

以上述べてきたように、他からの依頼を受けたり、プロジェクトに参加したりする場合の留意点としては次のようなことがあげられる。

- ・相手校との交流やプロジェクトへの参加が一方的なものに終わらないようにすること。例えば、三内丸山遺跡について青森県の小学校が紹介したとすれば、相手校の岐阜からは関ヶ原の戦い、奈良からは大仏などについての情報を提供してもらうことが大切である。このような相互の交流がなければ、問題追究が表面的なものに終わってしまう恐れがある。プロジェクトの場合も同様で、一つの題材について情報を交換するだけでなく、地域・自然、生活や遊びなどについても幅広く交流する余裕を持ったものでなければ、やはり追究活動は深まらない。
- ・交流の相手校を探すの難しいのではないかという指摘がある。自校の学習のねらいに沿った最適な学校を見つけるために、次のような方法がある。  
①交流校募集のページを出しているHP（NTTのHP等）を通して相手校を見つける。  
②全国の小学校が紹介されているページから、いろいろな学校のHPに入って、HPの内容を検討して交流を打診する。  
③教師が研究会、また、ML（メーリングリスト）等を通して知り合った全国の先生方の学校と交流する。筆者の場合は、社会科のMLや「教育を語る」MLで知り合った先生方と交流したことがある。また、筆者が公開している「雪国のくらし」「日本一のりんごづくり」のHPにアクセスして、いろいろな質問や感想を寄せてきた学校と交流した経験もある。
- ・以上述べてきたプロジェクト等への参加が、他から押し付けられたものではなく、子どもたち自身の興味・関心から発したものとなっていくようにするには教師の適切な環境設定が必要である。（注2）

## 2. 単元を立ち上げる3つの方法

——奈須正裕「総合的学習を指導できる教師の力量」から（4）——

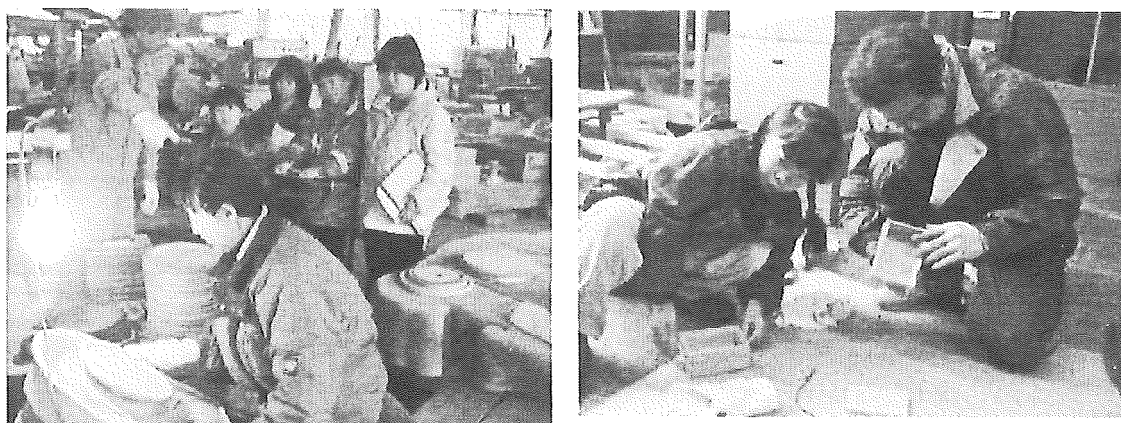
- ①「今年の総合学習は何をしましょうか。」と子どもにゲタをあずけてしまう。

- ②「今日は天気がいいから、お散歩に行きませんか」と投げかけて、子どもたちの潜在的求めに合致しそうな具体的対象がある場へ誘い出す。
- ③子どもたちの潜在的求めをみとり、それに合致しそうな具体的な活動を直接提案する。

①について

これが「問題把握」となり得るのは次の場合である。

- ア. 前年までの総合的学習や各教科による学習を通して、子どもに問題発見の能力や問題解決能力が育成されている場合である。この場合は子どもたちに、「今回は自分たちに任せてほしい」という願いが芽生えていることがある。大阪教育大天王寺小の実践（5）、奈良女子大学の実践（6）にみられるように、系統化されたテーマを持ち、全校が継続して総合的学習に取り組んでいる場合は、この方法でも学習問題が決まるようである。
- イ. 子どもが、「問題」を見つけられない場合や、はじめて総合学習に取り組む場合は、教師が他校の楽しい例をいろいろ紹介してイメージをつくってあげる必要がある。その場合、他校の「追体験」のようになってしまい、自分の問題として追究できないことがある。教師自身が、その学習の楽しさ、素晴らしさを実感し、単なる追体験に終わらせないようにしなければならない。



（写真は町の木材加工センターで、木工品の加工のようすを調査したり、実際に木工品づくりにチャレンジする子どもたち）

---

（注2）

環境設定という用語を、筆者は以下のように考えている。

教室内に掲示物を貼ったり、具体物を置いたりすること等だけでなく、子どもに問題を持たせるための「教師の多彩な仕掛け」がすべて環境設定である。

## ②について

これは、潜在的求めと合致するとは限らないので、時期と投げかけるタイミングによって、問題把握に大きな違いが現われる。

季節、場所によってどのようなことが出来るのか、地域のいろいろな情報の一覧がほしいところである。(かつて生活科でさかんにつくられた「活動できる場所マップづくり」のようなものである。)

ところで、散歩の途中にハプニングが起こるように環境設定をし、これが成功することもある。例えば、畑で草取りをしていたおばあさんと話をしているうちに、「いろいろな野菜を作ってみたい」という気になったり、川で投網をしているおじさんを見て、「川にいる魚を調べてみたい」という気になったりする。

偶然このような場面に遭遇することもあるが、教師がある程度下調べをしたり、準備をしたりして、面白い人物を意図的に出現させることもある。これが自然な形で行われるようであれば、問題把握としては効果的である。

ところで、ここで特に留意しなければならないのは、校外に子ども連れ出し(例えば「川」など)そこで見てきたことや疑問に思ったことをそのまま、羅列的に並べて学習計画を立ててはいけないということである。これらは一見子どもから出た「問題」のように見えるが、そうではない。

教師に「問題はありませんか」と問われたので、子どもが深く考えずに発表することも多い。ウェビングをさせてみても、子どもが、「知りたくてしょうがない」という状態でないこともある。

問題として熟成されていない場合は、潔く撤退する。この姿勢が大切である。各教科の学習と異なり、総合的学習には川に何回も出かける時間的余裕があるからだ。教師の力量が問われるところである。

## ③について

これは教師の出番が最も強く求められるものである。

教師から提案されると、学級の雰囲気は「やってみたい」ということになる。この提案の内容と提案するタイミングに教師の力量が発揮される。普段の授業、日常の学校生活の中での気づき、発見、子どもの日記などから、広く深く子どもの興味・関心を探る必要がある。

これが成功した例として、新潟大学附属小の「TAN・TAN・タヌキ」の実践がある。(注3) 教師の唐突な働きかけのように見えるが、子どもの日常生活を仔細に観察して出来た教材である。以下一部を紹介する。

「この間、学校帰りにタヌキを見たんだけど・・・。」

朝の会でボソッと切り出した、教師の一言が学級に波紋を呼ぶ。



子どもたちが「先生は嘘つきだ。」という。誰も信じない。実際子どもたちはタヌキを見たことがないのである。

タヌキのことを学級通信に書くと、何人かの保護者から、タヌキを見たという反応が出た。もしかするといえるのかな？子どもたちの確信が揺れる。そこで教師が7年前の新聞記事やビデオテープを見せる。追い打ちをかけるのである。しかし、7年前の記事というところが面白い。子どもが「昔のこと」だと反論する余地を残している。子どもの追究意欲が次第に高まるように絶妙のタイミングで働きかけをしたり、的確な資料を提示したりしているのである。

こうして、次第に「たぬきがいるのか確かめてみよう」という追究意欲が芽生えはじめていく。子どもを「その気」にさせたのである。以下、タヌキ探検、コンピューターの利用、自然保護、地域への働きかけと学習は多面的、総合的に展開されていく。

### 3. 問題の成立

藤井千春「子どもの求めに立つ総合的学習の構想」（8）によれば、「自分の思い・願いに根ざして進められている活動、自分が設定した課題についての追究がかべに突き当たったとき、すなわち、その実現に向けての進路に克服すべき妨害や行き詰まりの存在を認知したときに、問題は成立する。」ということになる。確かに、はじめは自分たちの願いを実現しようとして学習活動がスタートする。そして、その活動は順調に進むようにみえる。しかし、やがて、それが思ったほど容易ではないことに子どもたちは気づかせられる。予期しなかった多彩な問題が発生してくるのである。

次にあげるのは大阪教育大学附属天王寺小学校「すてきな池にしようプロジェクトⅠ」の例である。（注4）

身の回りにある生き物をテーマに学校の建物内外を広く調査した結果、かつては「ホタル池」として親しまれていた場所が、2年間の放置により、すっかり荒れ果ててしまっているのを発見する。伸び放題の雑草、何が住んでいるのかもわからない状態の水たまり。

それを何とか元のようなザリガニやヤゴの住めるような池に戻したいという

---

（注3）

新潟大学教育学部人間科学部附属新潟小学校の実践 （7）

子どもの追究の様相を「子どもが山に登りハンググライダーでそれぞれの目的に向かって飛行する様子」に例えて、「登山・助走」「フライト」「ランディング」の段階で構想している。上記の引用は「登山・助走」の一部である。

願いを持って学習がスタートするが、やがて、計画は挫折しかける。あまりにも雑草が多く、しかもその根が深いので難儀するのである。

しかし、子どもたちは、「素敵な池を取り戻したい」という大きな目標を思い出し、再び雑草取りに励む。そして、草取りは無事終了する。

次にグループに分かれて素敵な池に仕上げるために多彩な活動をするが、それぞれのグループに数多くの難題が立ちふさがる。例えば「看板」のグループの問題は次のようなものである。

- ・看板にふさわしいと思った木は大きすぎる
- ・堅くて切れない
- ・つるすための穴があかない
- ・飾りの花がすぐ乾燥する

このような難問は、他のグループでも同様かそれ以上に発生しているが、これらの難問に立ち向かう意欲は、はじめに子どもが持った「素敵な池にしたい」という切なる願いによって克服されることになるのである。

はじめの導入の段階で、教師の働きかけによって子どもは「その気」にさせられたわけであるが、教師は次のような子どもの思いや願いに着目し、これを学習活動に結びつけたのである。

- ・低学年の頃、ホタル池として親しんでいた。今でもそのイメージを持っている。
- ・2年間の放置により、すっかり荒れ果てている。これを元に戻したい。
- ・今の低学年の子がザリガニやヤゴを観察する場所がない。

このような子どもの心にある潜在的な願いを、発問や環境設定により学習問題に高めていくのが教師の力量である。

ここで、再度、単元の導入にあたって、教師の働きかけが重要な役割を果たすことと、子どもが解決を迫られる「問題」は、活動が始まってから、次々と登場してくるものであるということを確認しておきたい。

#### 4. ゲームを利用した問題把握

社会科で、次のようなゲームを考えて実践してみた。

- ・「学校あてゲーム」

---

(注4)

大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校 2001年2月の公開研究発表会  
4年研究授業「すてきな池にしようプロジェクトI」(全26時間)

- ・「仕事あてゲーム」
- ・「店あてゲーム」
- ・「クイズ消防署長さんに聞きました」

詳細については学事出版の「社会科ゲーム」（９）を参照していただきたい。

１時間設定で、ゲームにより思考力や判断力を育てるものである

この中のひとつ「クイズ消防署長さんに聞きました」について簡単に紹介すると次のようになっている。（注５）

- ① ５人ずつのグループに分かれる。１チームが２回ゲームできるように組み合わせ表を作る。
- ② 先攻、後攻を早押しクイズで決め、先攻になったグループは「町の消防署長さんが考えていること」について答える。（この場合の答えは、この町の消防署長さんの答えであるから、それが全国的に当てはまるとき限らない。）
- ③ 問題の例として次のようなものがある。○が早押し、◎が本番である。
  - この町の消防署長さんは男か女か
  - ◎この町で火事がおこりやすい月は何月か。
  - 消防車の色は？
  - ◎昔に比べて火事が少なくなったわけは？
  - 何をかけて火事を消す？
  - ◎水といたら、すぐ思い出す物や場所は？
  - 火事がおこったら何番に電話する？
  - ◎この町では、何時頃に火事が多いと思いますか。
  - 水をかける道具は？
  - ◎○○町で火事がおこると大変な場所は？
  - 署長さんは今までに火事を消したことがあるか？
  - ◎今まで火事が起こった時、どこにいましたか？

これは４年生の社会科学習のために考えたものであるが、ゲームをやり出すと時間があっという間に経ってしまう。社会科の限られた時間の中では余裕があまりないのである。また、子どもたちはこのゲームを経験して、出題範囲が

---

（注５）

「クイズ消防署長さんに聞きました」は、以前にテレビで放映されて人気のあった「クイズ百人に聞きました」という番組からヒントを得たものである。百人の人に聞くのではなく、一人の人に聞いて問題を作成するところが異なる。このようにすると問題づくりが容易である。（以下略）

消防署長さんに限定されていることにも物足りなさを感じていた。

このクイズを地域全体に広げて（地域の人々のようすやくらしに目を向けさせた）「○○町面白クイズ、○○さんに聞きました」のよう多彩なクイズづくりに挑戦させてみるのもよい。

そして、クイズの問題づくりのために、いろいろなところに調査にでかけたり、多くの人に取材したりするという学習を計画する。完成したクイズを使ってクイズ大会を行う際には、お世話になった方々を招待して特別ゲストになっていたいただくのもよい。

## V. まとめと今後の課題

追究する問題が子どもにとって「解決したい」「取り組んでみたい」というものになるために、主として4つの点から論を進めてみた。

例にあげたようなプロジェクトに参加することが子どもの追究意欲を高めること、また、教師の働きかけ、環境設定が子どもの主体的な学習活動を生み出すことを強調してきた。

これらのことを踏まえながら、以下のような学年のねらいや単元を考えてみた。

総合的学習がめざす子ども

・・・主体的・創造的に学習に取り組む子ども・・・

- ①基礎・基本を身につけた子
- ②追究能力を身につけた子
- ③表現力を身につけた子
- ④社会にはたらきかける子

---

### 低学年・生活科

- ・学習を楽しむ子ども
- ・学習意欲の重視 ①③

身近な自然や社会・人とかかわりながら、楽しい活動を通して、さまざまなものにふれ、発見する。

---

## 中学年

- ・ 学習を進める子ども
  - ・ 追究活動と追究能力の重視 ①②③  
地域に視野を広げ、地域の人々の生活や自然について、さまざまな方法で追究する。
  - ・ 地域・福祉・環境・国際理解・情報・その他  
3年「みんななかま！…プロジェクト深浦町の子どもたち！」  
「みんなの海」  
「見たい 知りたい ものづくり」  
4年「つで歩く人にチャレンジ！」  
「つながる海！深浦っ子プロジェクト」  
「二分の一成人式」
- 

## 高学年

- ・ 学習を生かす子ども
  - ・ 参画意欲と総合的思考力の重視 ②③④  
すばらしい人やすばらしい自然から、多くのことを学ぶとともに、社会や自然にはたらきかけながら、自分の生き方を考える。
  - ・ 地域・福祉・環境・国際理解・情報・その他  
5年「自然のめぐみとともに・・・日本海の夕陽と白神山地」  
「風車とリサイクルしせつアフイ」  
「求む情報！全国のともだち」  
6年「全国歴史マップづくりプロジェクト」  
「今、わたしたちができること」  
「チャレンジ！世界に友だちをつくるぞ！」
- 

これらの詳細な学習計画については稿を改めて述べてみたい。

本稿では、総合的学習の問題解決能力の育成について述べてきたが、テーマが意外に大きく深いものであったため、実際に総合的学習の展開にあたって必要な以下のような点について触れることが出来なかった。

- ・ 総合的学習における 基礎・基本
  - (1) 追究力
  - (2) 表現力

- ・教科と総合的学習の関連について
- ・学習集団づくり
- ・その他

残された課題は多い。次稿で触れてみたい。

## VI. おわりに

総合的学習が話題になってから、各地で開かれる公開授業研究会や講演会、シンポジウム等に参加させて戴いた。

奈良女子大附属小、大阪教育大附属天王寺小、横浜市立大岡小学校等の公開研究会はじめ多くの先進校の取り組みに触れながら、総合的学習のねらいは問題解決能力の育成であるという思いを深めた。また、総合的な学習においては問題把握の段階が大きな比重を得るということも実感させられた。

また、本稿の作成にあたっては、本校（深浦小学校）の先生方の取り組みの中からも多くの示唆を得た。「灯台もと暗し」という格言があるが、指導主事訪問の際に公開された、6年研究授業「ぼくたちのプロジェクトC」は素晴らしい実践の集大成であった。地域を調べ、地域に学ぶという学習を経て、地域に働きかける活動へと発展していくのであるが、2年間にわたる学習の一つ一つの中で、子どもの思いや願いが活かされるように、教師の的確な、そして熱心な働きかけがなされていた。

また、学級の子どもたちが、それぞれ友だちの発表に真摯に耳を傾け、共に学習活動に邁進していた。文字通り、学び合い、認め合い、高め合う集団であった。授業参観を通して、授業づくりは学級づくりであるということを再認識させられた。この学級を指導して来られた担任の林圭子先生から多大な示唆を得た。この場を借りて深く感謝の意を表したい。

本稿は問題把握についてほんの一部分を論じたに過ぎない。諸先輩や熱心な実践者のご意見を拝聴する機会を戴ければ幸いである。

参考・引用文献（インターネットはURLを表記）

1. 天内純一 2000年 インターネットの利用と総合的学習Ⅱ  
弘前大学教育学部附属実践センター研究報告書  
P 99～P 106 「テレビ会議システムを利用して、深浦町の水産業を伝える」  
P 111～P 112 「テレビ会議システムを利用した交流学习2回目」  
東京都羽村市の自動車工業
2. 天内純一 1997年 インターネットを利用した社会科学習  
弘前大学教育学部附属実践センター研究報告書 P 174～P 175  
「歴史を学ぶ…郷土の紹介」
3. 天内純一 2000年 学習の意欲・関心を高めるホームページづくり  
教育とコンピューター 5月号 学研
4. 奈須正裕 2001年 「総合的学習を指導できる教師の力量」 明治図書
5. 大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校研究紀要 2000年  
「子どもが学び方を学ぶ総合」  
各学年でめざす学び方を学ぶ子どもの姿を設定し、子どもの学びを重点化すること  
と、それにかかわる外的なものの2点から単元を作成している。
  - ・3年 「学習を楽しむ子ども」
  - ・4年 「学習をすすめる子ども」
  - ・5年 「学習をいかす子ども」
  - ・6年 「学習をつくる子ども」
6. 奈良女子大文学部附属小学校研究紀要 2000年  
「総合的な学びを育てる学習法」  
人間形成の立場から、「しごと」「けいこ」「なかよし」という3つの教育構造を  
とっている。このうち「しごと」は、自然、人間、社会の真実の姿を求めて、身近  
な問題を追究させていくというもので総合的な単元学習の形態をとっている。  
(80年余にわたる実践がある。)
7. 新潟大学教育学部人間科学部附属新潟小学校の実践 2000年  
第13回環境教育とエネルギーと教育シンポジウム（日本教育新聞主催）  
ポスターセッション資料
8. 藤井千春 2000年 「子どもの求めに立つ総合的学習の構想」 明治図書
9. 天内純一 2001年 上條・阿部編著「楽しみながら思考力を鍛える小学校社会科  
の学習ゲーム」 P 39～P 63

10. 深浦町立深浦小学校研究紀要 2000年度 2001年度
11. 村川雅弘 1999年 小学校学習指導要領の展開 総合的学習編 明治図書
12. 小学校「東書7プラン作成委員会」2000年  
「総合的な学習のカリキュラム・プランニング」 東京書籍
13. 大阪教育大学教育学部附属天王寺小学校編 「This is 総合」  
2000年 日本文教出版

\*\*\*\*\*

#### 参考・引用HP

1. きゅうりプロジェクト  
<http://www.fuzoku.gifu-u.ac.jp/sho/kyuuri/project.htm>
2. 総合的な学習らんど  
<http://www.nier.go.jp/saito/kuro/sougou.html>
3. NTTコネット博物館  
<http://www.wnn.or.jp/konet/>
4. 大阪教育大学 全国の学校が多数紹介されている。  
<http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/educ/ktj37.html#3C>
5. はなまるワールド  
<http://www.hanamaruworld.com/>
6. 文部省・教育用ソフト・コンテンツ紹介サイト  
<http://www.manabinet.gr.jp/soft/soft.htm>
7. 創育 (教育用ソフトウェア)  
<http://www.soiku.co.jp/>
6. 東京書籍 (総合的な学習関連のページやリンク)  
<http://www.tokyo-shoseki.co.jp/default.htm>